

漢法苞徳塾資料	No. 035
区分	診断・病因
タイトル	簡便法の提案と病因論
著者	八木素萌
作成日	

- 【1】四診法を検討してみると切経診以外の方法で診ているのは、問診を除けば五臓・五行の辨別に他ならない。
- 【2】臓腑の五行と病因の五行には、五行の同類性によって共震し共鳴するものであるから、生理的病理的反応の五行表現は、たとえば、「木」と「水」とか、「金」と「火」とか、「土」と「金」とか、「火」と「土」とか等のように複合的に現象するとか、単一的な表現を見せる、などの場合を考察すれば、複合的に表現されている場合には、どちらかが病臓であれば今一つは病因を示している。

「内傷病」の問題で重要なものは、神経・精神的に発症する場合には「瘀」の関与が大きい。このことは、『金匱要略』の示唆以来次第に確立されてきた認識である。故に「瘀」の形成の仕組みが具体的な臨床側面において認識される事と、それが病因的に蠢動する状況に対する具体的な臨床的理解がなされる事、これらが必要である。神経内科的な問題と精神科（脳神経科）として発症する場合の他にも、「内傷病」由来の疾病までをも視野においた検討課題があるのである。

七情（喜怒思憂悲恐驚）のアンバランスな発露や過剰な状態が、経脈の機能を種々の様相で変調させるので発病に至っている、と言うのが「内傷病」であると認識されてきたのである。「気」を「逆上・下陷・耗散・停滞・鬱結・閉塞・沈潜などなど」させるので、臓腑経脈の機能の不全が起きるに至ったのである。

『温病学』の完成によって、「七情」のよる「経気」に変調は、「気・血・津液・栄・衛」に変調や変容をもたらす。それは「痰」「飲」「瘀」「火」などの「病理的・生理的」産生物に変容して行くものである。その「病理・生理的」産生物が「経気」の正常な疎通状況を妨害する（経を塞ぐ）ことが発症させるのだと、論理が具体化されるようになった。この「病理・生理的」産生物を病因的に蠢動させる契機が問題である。その契機となるものは、健全な人には病因としての意味を現わす程では無い程度の「外因」の作用である。

七情の喜怒思憂悲愁驚も五行に次のように「喜＝火・怒＝木・思憂＝土・悲＝金・恐驚＝水」と分類されている。「内傷病」発症の構造に関する上記のような論が成立した事によって、治療論も飛躍的に前進した。七情の五行分類は五臓論的な対応を、七情がアンバランスに現象する時に引き起こす「気の変容」の様相に関する把握―上逆・下陷・耗散・閉塞・耗散・鬱結など―は「気血」の変動様相に対する対応を、「痰」「陰」「瘀」「火」の問題にはそれらへの対応論があり、「生理・病理的」産生物の発症契機には、「外因」要素の関与があるとの論によって発症契機を具体的に把らえられるのでこの側面にも対応できる。つまり、発症契機への外感病的対応の側面・

五行論的な五臓対応の側面・病因物質への対応という側面・気変容の状況は経脈異常を具体的な様相との関連性においての把えた上での対応という側面、これらを組み込んで総合的な病像としてイメージした上で、病証に治療的に対応すれば良いと結論できるものになった。

- 【3】外感病は病因の五行性は、同じ五行的な性質の臓腑経絡と共震する現象（バイブレーションの波長が合うように）を見せる、故に、病臓腑の病証と病因の五行の病証とが並行して現われる。この法則性が病因の診別を可能にする。しかし、この問題には更に、外感病は皮毛腠理から次第に内に入って行くものであるから、この表から次第に裏へ侵襲して行くという構造に関与するものが、病証的にも介在することになる。それが、つまり、三陰三陽（太陽・陽明・少陽・太陰・少陰・厥陰）である。

「経」病からその経の「腑」病へ伝変の伝経現象、「経」から他の「経」への伝変（同名経相互間のもの、隣接関係に伝わるものが主）する伝経の現象、複数経が相い前後して病むものの合病の現象、複数経が並列的に病むと言う并病の現象、経病段階を飛び越してイキナリ臓に病邪が入る直中の現象など、これらの「伝病論」における、生理と病理に関して『傷寒論』『金匱要略』の達成の上に立つ「傷寒学派」の理論構成が在る。

『素問』『熱論』が外感病の中では「傷寒」が最も厳しい邪であることを記述しつつ、三陰三陽論を展開しているが、『傷寒論』はこの論を忠実に受け継いだ上に、この三陰三陽の病証論をさらに敷衍し詳しくしたものである。元代の『鍼灸四書』には、「傷寒学派」の三陰三陽の論を「太陽」は「太陽経」と把え「陽明」は「陽明経」と見て、鍼灸治療を組み立てた記述が見られる。このような態度は実は『傷寒類証活人書』（朱肱）の記述にも見えるように、湯液家によって既に医者の世界に常識化していたのである。

病邪は先ず皮毛腠理の分から犯すという事には、「衛・気・榮・血」では「衛」分から犯すので衛気が表で邪気に抵抗するという段階から、病証が始まると言うことである。「衛」分または「衛気」に分野は「皮毛腠理の分」である、また「表」である、また「陽の分」である、また「脈の分」（経脈の流注上の枢要な部分）でもある。五臓では「肺の分」であるが、また経脈体制においては体表を最も広く分布している経脈、つまりは「太陽経」の「分」である。

このような構造から、外感病の病証には、初期段階にあっては臓（肺）の病証、病邪の五行性に応ずる病証、経脈に流注と経脈の性質に関連する（太陽病）病証、という三側面があるのが把握され理解されるのである。

- 【4】外邪の性質の生理病理への影響の問題が、外感病の診察と治療と研究上において重要な意味を持っている。

- a) 『風』は五行においては『木』である、『木』の性質は、陽の始発であり、若芽が成長して行く有り様のように、しなやかであり伸びやかであるが、まだ不安定で脆さがあり、動き回り賑やかでもある。陽の上昇性・風の浮動性・風の変化し易さ・等などが、木の「臓」の主る各種の生理的機能の変調として表現される。

- b) 『暑・熱』は五行では『火』である、
- c) 『湿』と、難経の言う『勞』『食』は、五行では『土』である、
- d) 『燥』と、難経の言う「傷寒」は、五行では『金』である、『難経』が「傷寒」を「金」に配当しているのは、「十五難」の記述と「五十八難」および「七十四難」「七十難」などの記述が軸になっていると思われるが、それが「肺」を傷害する「邪」としての「秋気」であると見ているのであるから、「秋気」を『燥』と表現するか『傷寒』と表現するかの問題のみである。「五十八難」が『傷寒有五』として「中風」「傷寒」「湿温」「熱病」「温病」に分類している。これは『素問』熱論第31の記述を、横ににらみながらの議論であることは歴然としている。この金性の邪は、「収斂性」「涼燥性」の邪であり陰性の邪である。
- e) 『寒冷』と難経の言う「湿」は五行では『水』である、「傷寒」「燥」が上から冷えて体に侵襲する「邪」であるのに対して、この「水」性の邪は冷えが下から体を侵襲する「邪」であり、「金」性の「邪」が「燥」性が基本になっているのに対して、「水」性の「邪」は「冷涼」な「寒邪」である、凍結・氷湿性を兼ね備えている「寒邪」なのである。「六因の邪」の中では最も「陰性」が強いものである。「凝結・氷結・凝縮性」「閉塞性」「沈潜性」を持っており、『傷寒論』に「最も殺癘の気なり」と表現されている。
- f) 「春・夏・秋・冬」の四季の「気」を「成・長・収・蔵」として把握し認識している。「長夏」の「気」を言う時には「化」とする。「春＝生」「夏＝長」「長夏＝化」「秋＝収」「冬＝蔵」という訳である。「外因」の「五行」もこの性質を持っている。

#### 【5】五臓の五行を廻って

- a) 「肺」……「五臓の華蓋」「相傳の官」、「西風・秋気・金気に配す」、「其の徳は義」「蔵魄」「志は悲」、「燥」「熱」「寒」を悪む、「其の変は咳」「色は白」「味は辛」「臭は腥」「液は涕」、「尺皮は濇」「脈は毛（濇）」「其の華は毫毛」、「主気」「司治節」「主皮毛腠理」「肅降・布気」「主燥気」「水の上源」。
- b) 「心」……「君主の官」「南風・夏気・火気に配す」「其の徳は礼」「蔵神」「志は喜」「心は熱を悪む」「変は憂」「色は赤」「味は苦」「臭は焦臭」「液は汗」「尺皮は数」「脈は鈎（洪）」「其の華は面色」
- c) 「脾」……「中宮」「倉廩の官」「其の徳は信」「統血」「志は思（憂）」「脾は湿を悪む」「変は噦」「色は黄」「味は甘」「臭は香臭」「裏血」「液は涎」「尺皮は濡（軟）」「脈は代（緩）」「其の華は口・唇（乳）」
- d) 「肝」……「將軍の官」「其の徳は仁」「蔵血」。
- e) 「腎」……「作強の官」「其の徳は智」。
- f) 奇恒の腑……『素問』五蔵別論第11。（脳・髓・骨・脈・胆・女子胞）